賢人たちの年代別人生論

	孔子 B.C.551～449	白楽天 A.C.772～846	世阿弥 A.C.1363～1443	ゲーテ A.C.1749～1832
	晩年に人生を振り返り	58歳の漢詩	30代後半に「風姿花伝」で	心を動かすもの
10歳				菓子
	学問を志す		役者として最初の壁	
20歳				恋人
			一生の芸が定まる時期	
30歳	自分なりの考えを確立			快楽
		欲に振り回される	芸の絶頂期	
40歳	世間に惑わされなくなる			野心
			衰えが隠せない時期	
50歳	天命を悟る			貧欲
		人生で最良の時期	何もせずとも 花が残る役者でありたい	
60歳	ありのままを受けいれる			
70歳	直感に頼っても 道を外れることがなくなる	病に振り回される		

世阿弥「風姿花伝」

- 室町時代の能の大成者、世阿弥の能楽論。
- 第1章「年来稽古条々」は年齢別の稽古の心得。
- 世阿弥は人生を7分割

  7歳、12～13歳、17～18歳、24～25歳、34～35歳、44～45歳、50歳以降。
- キーフレーズ
  - 時分の花　　その時かぎりの魅力
  - まことの花　　決して散ることのない魅力

一期の芸能の定まる初め（24～25歳）

24,25歳の頃は、一生の芸が決まる初めの時期と世阿弥は説く。

「見る人の一旦の心のめずらしき花なり。」

デビューしたての頃は周囲の称賛を得ることもあるが、それは一時的な珍しさのもたらす魅力にすぎない。もし、本人が勘違いしてしまうと、

「時分の花をまことの花と知る心が、真実の花になお遠ざかる心なり。ただ、人ごとに、この時分の花に迷いて、やがて花の失するをも知らず。初心と申すはこのころの事なり。」

一時的な魅力（時分の花）に自分を見失っていては、後に本当の魅力（まことの花）を手にするのは難しいだろう。

盛りの極め（34～35歳）

34,35歳の頃は、芸の絶頂期と世阿弥は説く。

「この時分に、天下の許されも不足に、名望も思ふ程もなくば、いかなる上手なりとも、いまだまことの花を極めぬ為手と知るべし。」

この時期までに世に認められなければ、「まことの花」にはほど遠い。

「上がるは三十四五までのころ、下がるは四十以来なり。」

芸が向上するのは、34,5歳まで。40歳以降は落ちていくのみ。

そして44～45歳の時期に衰えてなお、輝くものがあれば、それこそが「まことの花」であると世阿弥は説いている。

徒然草の「いつやるか？ 今でしょ！」

- 兼好法師が鎌倉時代末期に書いた「徒然草」は日本三代随筆の１つ（残りの2つは「枕草子」「方丈記」）

- この世の無常を知り、今を生ききることの大切さを説いた

「必ず果たし遂げむと思はむことは、機嫌を言ふべからず。」（155段）

「一生のうち、むねとあらまほしからん事の中に、いづれか勝るとよく思ひ比べて、第一の事を案じ定めて、その外は思ひすてて、一事を励むべし。」（188段）

胸のうちに「これ！」と決めたものがあるのなら、タイミングを選んだりせず、今すぐやりなさい！ と兼好法師は説いた。

今日が人生最後の日だとしたら

スティーブ・ジョブズ（1955～2011）は2005年のスピーチでこう語った。

> ″I’ve looked in the mirror every morning and asked myself: ″If today were the last day of my life, would I want to do what I am about to do today?″ And whenever the answer has been ″No″ for too many days in a row, I know I need to change something.“

ジョブズは2004年8月にすい臓がんの手術を受けた。いつ燃え尽きるか分からない自らの命への切迫感が、iPhone（2007）やiPad（2010）を生んだのかも。

> 「寸陰惜しむ人なし。・・・刹那覚えずといへども、これを運びて止まざれば、命を終ふる期、たちまちに至る。」（徒然草108段）

人生は一瞬（寸陰・刹那）の積み重ね。そんな一瞬を惜しまず、意識せずにいたら、たちまち一生が終わってしまう。